

K-6

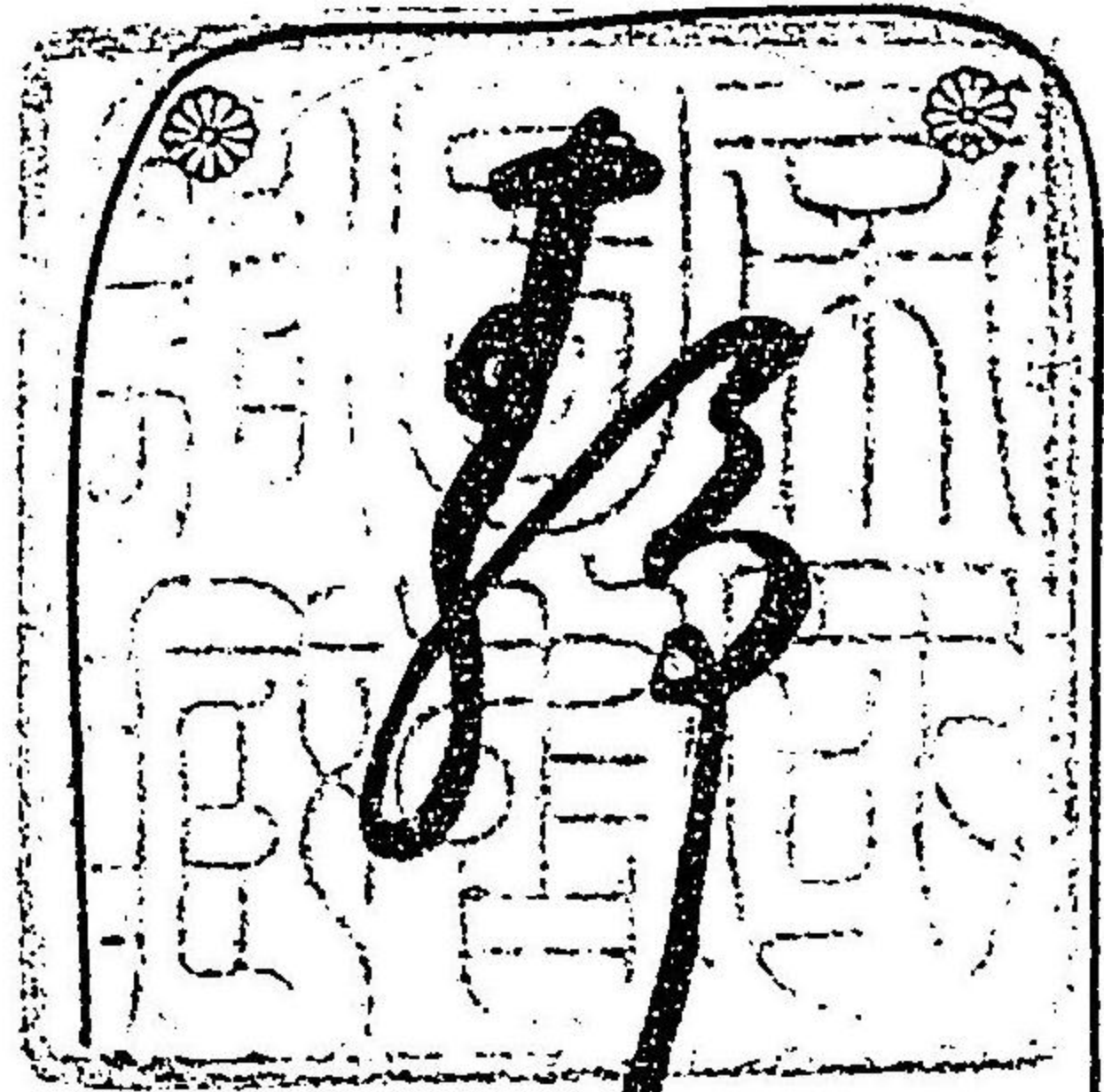


菅谷秋水作

258
14

特50

199



菅谷秋水作



叙

地中淡淡之水。爲九天萬化之雲。霏霏之雨。紛紛之雪。爲潺湲溪谷之流。爲汪洋萬里之波。水之循環無限。百花爛熳。禽鳥啾啾之春。爲綠陰青青。清風徐來之夏。林山飾錦。蟋蟀奏樂之秋。爲皎月千里。白雪皚皚之冬。時之旋轉無窮。今年之我。非少年之我也。老年之我。非今年之我也。刻刻變化去來。死生之變化。變化之大者也。刻刻之變化。變化之小者也。天地無限。我亦無盡。變化無極。循環無休。我化爲鷲而戾天可也。我化爲魚而躍淵可也。或爲柳而綠可也。或爲花而紅亦可也。一禽一魚。一草一木。皆天地也。何嘗人獨有樂天地。現在之我者。不知過去之我。然其樂無限。然則未來之我者。不知現在之我。其樂無限。亦豈獨不同於現在哉。

新曲
静

目次

序幕 鶴ヶ岡八幡社頭の場

登場人物

男姓

島山次郎庄司重忠

稲宜宮内主膳

白丁

甲

女姓

乙 丙 丁 戊

二幕 同八幡祠前舞の場

男姓

右幕下頼朝
大江大膳太夫廣元
北條四郎義時

女姓

御臺所政子の前
待女 松嶋

畠山次郎庄司重忠

和田小太郎義盛

結城七郎朝光

梶原平三景時

工藤左衛門尉祐經

梶原三郎景茂

長沼五郎致治

舞姫

早月 楓 静

目次終

新曲

静

序幕

鶴之岡八幡社頭の場

登場人物

男姓

女姓

島山次郎庄司重忠

稱宜宮内主膳

白丁 甲

乙 丙 丁 戊

曲

花より明くる星月夜。鎌倉山の春の色。靨く雲の朝ぼ
らけ。神のしらゆふ掛巻も。神さびわたる瑞籬や。弓矢
を護る八幡の神の誓ひは石清水。忝くも應神の帝を
祠り奉る。御裳裾川の末永く。流も清き源の其源の氏

曲

神と仰ぎてこゝに鶴ヶ岡。千代もかはらぬ松の峰。常
盤の色も時を得て十返り深きみどりかな

暁に湘水を汲んで楚竹をもやす。それならで。御垣を
守る衛士が火の心細くも立つ煙り。稱宜が情けの神
酒のさゝ。汝れにもいつか春の來て。憂きを掃ふの玉

白丁甲曲白

御庭を清む帚木も

乙曲白

把る手もうしや酔心地

丙曲白

夢なら覺めな

丁曲白

酒なら醒めな

戊曲白

あら心地よや

甲白

アハ……。皆の衆も大分酔ふておりやるなにか面白い話はない
かや

乙白

あるともく

甲丙丁戊白

聞かしやれく

乙白

それはのさのふ大手の下馬での……さ……なに……滅多に聞
かすことではないがの

甲丙丁戊白

聞かしやれく

乙白

それはの静御前の事よ

丙白

言はしやるな。たわいもない事

丁白

静のはなしは今日鎌倉の大評判

戊白

誰しも知らぬものはない判官殿のおもひもの

甲白

國色の聞へ高き其静を垣間見んとて若殿原が思ひくりに訪づ

れど

丙白

すげなく言ふて三日月のちらとも顔を見せばこそ梶原殿の三

男が親の威光を肩にきて無理無體の横戀慕も

丁白

みん事静に窘められいさ耻ぢ搔いた

戊白

鎌倉の面汚し。そんな事ではありやらぬか

乙白

いゝやもつと凄い話でありやる

甲丙丁戊白

なんと

乙白

それはの静が身あもの故じや

甲丙丁戊白

身ごもりてか

乙白

あうさ

甲白

己らが娘アも酸ひもの嗜いて

丙白

ひしづ走らし懸み顔

戊白

静とても同じ女孕むに何んの不思議がある

乙白

否さそこに底ある奥の院

甲丙丁戊白

聞かしやれく

乙白

滅多に扉はあけられず

甲丙丁戊白

とないの事云はず早ふ聞しやれ

乙白

それを云ふには今一升皆の衆騎るか

甲丙丁戊白

驕るともく

乙白

左らば語て聞かそうか

甲丙丁戊白

聞しやれく

乙白

嗚呼聞くも恐ろしや二品様には根を断ち葉を枯らす御思召と
やらで静御前の姪める子が女なれば命は助く若しも其子が男
の子なら七里ゲ濱へ沈めにかけてよと梶原殿御内命をうけ安達
三郎殿へ密々の御説のよし壁に耳ある世の譬へ知らぬが佛の
静御前若しも此事知たなら生きた心は無かるうよ天に口なし
人を以て言はしひと何んと恐ろしい話ではないかや

甲白

それは又餘まり惨い、二品様の御心根判官殿は肉親の御兄弟で
ありながら如何に不和の御中なればとていとしや罪もなき御
胤までもなきものとは

丙白

左：：それが上つ方と云ふものは、兎角に人情の薄いものじや。
今に見やれ二品様の御子孫も因果はめぐる小車の

丁白

人手に掛つて御果なさる御方も出来う

戊白

左うともく。天とう様が見て御座らつしやる

甲白

皆の衆これは内密じやぞよ若しも知れたら己れらが素首は飛
ばうぞよ

甲乙丙丁戊白

あゝ怖やく（皆々首をすくめる）

甲白

明智と呼ばるゝ畠山殿……よも御諫言なさりとふなもの

乙白

左……それが未だ表沙汰ではなし……いくら明智の重忠殿で

も……御存のない事は

丙丁戊白

左うであるく

丙白

あれあそこに稱宜殿の影が見へる

乙白

叱つく

甲丙丁戊白

我點く

曲

天清く地潔く。和光の影も明らかに。實にも畏き宮柱玉の階し塵もなし。蹈むあとまでも心せよ

稱宜宮内主膳白

今日は右大將家當八幡社殿に於て舞の御催しこれあり。正卯の刻御成り仰せ出され候間其方共も心して御成り道を潔め候へ

甲乙丙丁戊白

畏つて候

(甲乙丙丁戊能き程の振りにて次第に退場稱宜亦尋て退場)

武威耀かす源の由縁りも高き白旗の山より出る朝
日影。こち吹く風も久堅の。そらにまられぬ花の雪。我
が衣手は寒からで。歩みをはこぶ春の日の光り長閑
き宮居かな

重忠白

判官殿都御没落の後ら。大物の浦に難船し玉ひし。ばし芳野に匿
れさせ玉ひしが。今に御行衛定かならず。或は作り山伏となりて
奥へ御下向の赴世上其沙汰取りく。なり鎌倉殿御心を惱ませ

られ此度都六波羅より差送りし静こそ。九郎の行衛知るべきも
のなれば。よく問糺せと君の殿命某謹て按ずるに。鬼神を欺く判
官殿なれば。纖弱き静を責問ふたれば。とて其詮やなかるべし。依
て拷問に事かへ静に舞を命じ。誠判官の御行衛知るものなるや。
事の實否を究めんと。の御許を得。今日は八幡祠前に於て静に舞
を申付候。今日の役目は某が一生の大事。重忠裁斷誤らば。不明の
耻を貽すのみか。君に不仁の譏りや得させん

重忠曲白

眼裏に塵りありて。三界窄く。心頭無事にして。一生

寛し

曲

曇りなき身の十寸鏡君を思ふ眞心は天も納受やし
玉ふらん。いざさらば神の御前に額きて君の御爲め
國のため御代安泰を祈らなん

(重忠參拜了りて社頭能き處に立ち)

重忠白

いかに誰れかある

宮内主膳白

御前に候……今日右大將家舞の御催にて調度の役々昨夜より
詰切り居り既に用意萬端整ひ候由承る。畠山殿にはそを見そな
はせ置れん爲め早天の御出仕に候や

重忠白

いや左様の義に候はす某ちと心願の筋これあり供部に先だち
社參致して候ぞや

主膳白

それは一段の御事にて候

重忠曲白

弓は袋刀は鞘におさまれる。

主膳曲白

御代の恵みの深ければ。五雨十風時を得て

重忠曲白

神慮をすゞしむ歌舞の曲

主膳曲白

今見ん事の嬉しさよ

重忠曲白

静こそは去ぬる壽永の夏神泉苑に雨乞の御時雨を降らせし奇

代の名人法皇御感ましまし給ひ。日本一の宣旨を賜はる舞なれば

主膳曲白

御神威もはかりなふこそ存候……もはや御成の時刻程遠くも候まじ別院にてしばし御休みあらふずるにて候

重忠曲白

然らば主膳

主膳曲白

島山殿

重忠曲白

冷艶全く雪を欺き餘香たちまち衣に入る實に面
白きからうたの春を惜める花の意詠めも盡きぬ
風情かなやな

二幕 同八幡祠前舞の場

登場人物

男姓

右幕下頼朝

大江大膳太夫廣元

北條四郎義時

畠山次郎庄司重忠

和田小太郎義盛

結城七郎朝光

女姓

御臺所政子の前

侍女

松嶋

早月

梶原平三景時

舞姫 静

工藤左衛門尉祐經

梶原三郎景茂

長沼五郎致治

其他諸士

曲

花は劔佩を迎へて星初めて落ち柳は旌旗を拂ふて
露も麗らに朝日影千代を壽く眞鶴のゆきかさなり
て鳴交はす雲井の空を長閑なる

(此曲了ると警蹕と共に御簾を掲ぐ大小名平伏す)

大江廣元曲白

夫れ天の時は地の利にしかず地の理は人の和に
しかず

北條義時曲白

人は石垣人は塀

畠山重忠曲白

情けは味方仇は敵

和田義盛曲白

實に難有き御吟哉

結城朝光曲白

礎かたき鎌倉御所

梶原景時曲白

千代に八千代にさゞれ石の

工藤祐經曲白

巖となりて苔のむす

梶原景茂曲白

御代萬歳ぞめでたき

長沼致治曲白

御代萬歳ぞ目出たかりける

右幕下頼朝白

如何に重忠申聞つる舞の所望心得てあるか

重忠白

心得て候

御臺所政子白

急ぎこれへ召され候へ

重忠白

畏り候如何に三郎景茂どの君の仰に候ぞ静をこれへ召され候

二八

へ

景茂白

畏り候

(景茂御前をまかり。花道よき程の所に坐し)

やあ如何に静やある君のお召しに候ぞ急でこれへ参り候へ

曲

時しも頃は彌生央柳櫻をこき交せて花の東の都か
な。平治の春壽永の秋も夢の跡花も紅葉も鎌倉山な

ひかぬ草もなき世にもなになかくに女郎花手折
らば脆き露の身も仇し野分きに色かえぬ松の操ぞ
まほらしき

静白

(内より)

左らば唯今それへ参るべう候

曲

梨花一枝雨を帯びたる粧ひの我が戀衣袖濡れて落
つる涙の玉禪きかけてぞ祈る判官の御行末は白河

二九

三〇
やよるべ渚の捨小舟花を見捨るかりがねのわれは
夫れには引かえて霞と共にふる里の都のそらを跡
にして知るも志らぬも逢坂の關踰へ行けば鏡山わ
が面影の衰へを寫す姿も耻かしや美濃尾張りさへ
如何ならん雲の手まげき八ッ橋を渡るもつらき鹽
見坂世の險しきに比ぶれば小夜の中山うつ山今
朝來て見れば大井川きのふの淵は瀬となりてうつ
れば變はる世の中を人はなにとも清見瀉仰けば高

き富士が嶺に積る思の志ら雪やうすき氷の心地し
て踏む足柄や箱根山うら淋しくも影薄き鎌倉山の
星月夜仇し雲井に蔽はれて

静曲白

ん
是れは磯の禪師が女静にてさぶらふぞや思ひも
うけぬ今日の逢ふ瀬耻しながら東の君にみえ

頼朝白

(静よき處に坐し平伏す)

扱は聞及ぶ静とは汝よな汝ならて九郎の行衛知るべき者なけ
ればこそ召しよせて糺しもすれ今四海漸く静謐に歸し萬民堵
に安んず然るに不軌をはかる亂人却て骨肉の間に出入るは天朝
へ對し奉り此上の恐れやある女性なりとも此の道理りや得知
らん包まらず明かし候へ

静曲白

這は情けなき御錠かなやな實にや狡兎盡きて良
狗煮らる判官殿露御過りのなきものを君讒らの
言を用ゐさせ玉ひしよりいひ開くべき腰越の關

はとざして道もなくまた引かえす神無月罪なき
人は身隠れて雲井のそらも常闇みに嵐ぞさそふ
堀川の流れの末は播摩瀉武庫山おろしに障へら
れてよし世を忍ぶ吉野山御行衛さへ白雪やくら
からぬ身ぞ是非もなし有るに甲斐なき身にしあ
れば唯此うへは此いのち召されて晴らさせ玉へ
候へ

重忠白

お恐れ多き事ながら重ねて問ひ給ふとも今は其詮なかるべう
候如何に静判官殿の御行衛は又問ふ事なかるべし扱も今日御
臺所政子の前静の舞と御覽せんとの御所望により一さし舞候
へ

静曲白

御行衛さへまら驚のかはく間もなき濡れ衣干す
よしもなき我君を思へは晴れぬ皐月やみ。なにな
かくに舞の袖殊更この鎌倉に來りしより兎角
心も勝れず候へば唯々許させ玉ひかし

政子白

静の申す事も左る事ながらそは餘りに情れなし是非に一さし
舞候へ

景時白

御臺所の御所望といひ殊に御前の恐れもありいなむは却て不
敬の罪是非々々一さし舞候へ

静曲白

心こゝにあらざれば身はうつ蟬のから衣翻へす
羽袖もおもはゆし唯此儘に御違賜はり候へ

重忠白

實にや思ひうちにあれば。色外に顯るとかや。静の否み玉ふは。君の不敬は去る事ながら。判官殿の御行衛を包むに似たり。心に横障の隔てなくば。舞ふて疑はらされ候へ

曲

今は静も梓弓かへす。辭もなく涙。弓矢の神の御寶前。誠を守る神なれば。同じ源氏の御流れ。判官殿の御行末。守り玉へと念珠して。御請けにこそ及びけれ

頼朝白

やあ如何に誰とある鼓の役仕り候へ

景時白

左衛門尉こそ小松殿の御時内のみかぐらに召され候けるに。天上に名を得たる小鼓の上手にて候へば。工藤殿こそ然るべう候

頼朝白

さらば祐經撃ちてまはせ候へ

祐經白

餘り久しく仕らで鼓の手いろなどこそ。思ふ程に候まじけれど。も御説にて候へば。仕りてこそ見候はめ。但し鼓一挺にてはかな

ふまじかねの役を召され候へ

頼朝白

かねは誰れに申付ん

朝光白

それこそ長沼の五郎こそ音に聞ゆるかねの名人にて候へ

頼朝白

然らば致治仕り候へ

致治白

畏り候扱時の調子は大事のものにて候誰れにかねとりを御吹

せ候や

義盛白

畠山殿こそ院の御感に入りし笛にて候

頼朝白

扱は重忠には文武のみか斯る道にも堪能なりけりや笛の役仕

り候へ

重忠白

某父重能に従ひ都在番の砌り聊か嗜み申せしが今は手にだに
取らざれど君命なれば黙止し難し然らば一曲を奏て申さん

(祐經致治重忠と共に御前をまかり出る)

(左衛門尉は紺葛の袴に。さくさ色の水干に立烏帽子。したんの
胴の羊の革にて張りたる鼓の。むつの緒のしらべをかきあは
せて。左りの脇にかひ挟みて。袴のそば高らかにさしはさみ)

(五郎致治は同じ紺葛の袴に。山鳩色の水干。立烏帽子南縁を以
て作りたる黄金の菊形打たる調拍子に。たくほくの緒を入れて)

(次郎重忠は白き大口に。白き直垂に。紫革の紐つけて。折烏帽子
のかたがたをきつと引立て。松風と名つきたる淡竹の葉調
を持ち袴のそば高らかに引あげて)

(各々設けの座に直る)

曲

雲の通路まで去ばし。吹く春風も心せよ。其時静はし
づくと。風折り烏帽子打被ぎ。紅の袴踐みしたぎ。
皆紅の扇をひらき。舞ひづる影や天乙女。此の年月の
うき事に。面ざしは瘠せたれど。眉濃かに薄化粧。此世
の人とも思はれず。實にや海棠の雨を帯たる風情に
て。彼の揚貴妃も李夫人もいかでか之れに勝るべき

静曲白

君が代の長閑き色や春の花の塵りにまじはる雪

祐經曲白

ならばふむあどまでも心せよ

夫れ春の花の樹頭にのぼるは上求菩提の機をす

め

致治曲白

秋の月の水底にしづむは下化衆生のかたちを見
す

靜曲白

其法相も嵐ふく花のあしたやむら雲に眞如を隠
くす月の夕たのみても甲斐なきぞ浮世なるらん

曲

時を感じては花も涙をそゝぎ別れを恨みては鳥も
心を動かせりありのすさみにくきだにありきの
あとは戀しきにありてはなれし面影をいつの世に
かは忘るべき別れのこと悲しきは親のわかれ子
の別れすぐれて實にかなしきは夫妻の別れなりけ

四四
り。今も猶夢と思はれ。幻つとも得ぞおもほへぬ君の
面影。思ひ出でしと明暮に。思へど思ひ忘れんと。思へ
ば浮ぶこしかたを。繰り返しても。紆環きの昔にかえ
すよしもなや。御痛はしや。判官は世を忍ぶ身のなら
ひとて。御菅笠にかくれ。箆身に泌む雪の白妙に。たの
む影とて立寄れば。また袖濡らす吉野山。こゝも嵐の
さそひ来て。天が下には隠れ家もなき御成りはて

曲

其時判官宣ふやう。義經いみじくも。弓馬の家に生れ
来て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。山野海岸
に。赴き臥し明かす。武士の鎧の袖枕。かたしく隙も波
の上。ある時は舟に浮び。風波に身を任せ。ある時は山
脊の馬蹄も見えぬ。雪のうち。に海少し有る夕波の立
くる音や。須磨明石の。どかく三年の程もなく。敵を亡
し靡く世の。其忠節もいたづらに。なりはつる此身の。
そも何といへる因果ぞや。思ふ事叶はねばこそ。浮世

なれと。知れどもさすがなほ思ひかへせば梓弓のす
 くなる人は苦しみて。讒臣はいやましに世にありて。
 (かへり見) 遼遠東南の雲をおこし。西海の雪霜にせめら
 れうもるうき身。ことわりまたふべきなるに。たゞ
 世には神も佛もましまさぬかや。うらめしのうき世
 や。あらうらめしのうき世や(安宅)と。かこちたまふも
 道理りや。つるに泣かぬ辨慶も。堰あえぬなみだぞ不
 覺なる。主從顔を見合せて。天に踏し地に踏す。御有様

ぞ痛はじき。判官御涙はらくと。静の御手をとる玉
 ひ

静白

聞及ぶ此山は。役の行者の蹈みとめられし。菩提の峰なれば。精進
 潔齋せては。叶ふまじきに。我れ御身の情けに。牽かれ是まで。召具
 し來ること。神慮の恐れあり。且つは又此期に。及び義經は。婦人を
 伴ひさまよひしと。指さしれん事。のうしろめたさ。是より還りて
 母禪師と都に。あれよかし。いかて再び都の。月花をめてん時のな
 からめやと

静曲白

二世の筐と御手柄ら

静白

懐中よりとり出し玉ひこれぞ朝夕に我俤を寫せし鏡見ん度毎
に義經と思へやと

静曲白

初音の鼓もろともに下し賜ひし此二品いつくま
でも御供とこそ思ひしにこはそも何んといふし
での正木のかつら長き世の契りの神も捨させ玉

ふか情けなや

曲

我が君一世の御大事泣く時ならじと辨慶が勵ます
詞に判官もすがる袂を打拂ひさらばよ静の御聲も
吹雪の音に障られてあと白雪のみよし野は呼ど叫
べどあら悲しや木靈の返へすばかりにて戀しき人
の影もなし形見の鏡とり出し見れば涙にかきくれ
ておのが姿も見へわかず着たる笠も風に奪はれふ

五〇
みたる草鞋も雪にとられ。裾はつらゝに閉ぢられて。
身は濡鷺のうきおもひ。月の行衛をせめてもの。たよ
りの綱とたどり来て。西へくど行く程に。谿のあな
たに幽けくも。ほの見へそむる火の光り。夏ならばこ
そ螢とも見るべきに。こはるも鬼火か狐火か。さらて
も嶮しき岨づたひを。たどりてゆけば嬉しやな。藏王
権現の導き玉ふ御燈なるぞ難有き

曲

静は嬉しさ限りなく。天を拜し地を拜し。靈驗無双の
権現にてわたらせ玉ふと聞くからは。判官の御身の
上事故なく守らせ玉へと念珠して。神淋びわたる夜
るの戸も。はや曉の鐘の聲。吉野執行に見咎められ。問
糺されて六波羅に送らるゝ身の情けなや

静曲白

夫れ疑は人間にあり。天に偽りなしかや。我眞心
は天地の神も照覽ましますらん

曲

雪をめぐらす花の袖。神泉苑のそのむかし。日本一の名を賜ふ。さすが静の舞なれば。その心根にほだされて。矢猛心の武士も。皆哀れをぞ催しける

重忠白

宮商角徵羽律に適ひ。聊も違ふ處なきは。全く以て判官の御行衛存せざること明白なり。今は疑ひよもあらじ

静白

あら嬉しや。扱は疑の雲晴れしか

五二

曲

其時静は水干の袖引はづし。又しづくと立ちあがり

静曲白

しづやしづ。賤のおだまき繰り返へし。むかしを今に。なすよしもかな

曲

あとは涙にかきくれて。翳しかねたる舞の袖。打かつ

五三

ぎてぞ伏しにけり。忽ちひゞく雷の御一聲もあら
くしく

五四

頼朝白

下れつ女郎賤のおだまき繰り返し九郎が昔に還れとや謠ひけ
るぞ奇怪なれ如何に景時静が腹を裂き敵の胤を断ち候へ

景時白

御憤りは左る事ながら仰せ餘りに無情とこそ覺へ待べれ身二
つのは後には兎も角もなし玉へそれまでは某に預け賜はり候へ

政子白

思ひそ出る其昔烈しき雨の夜にまぎれ君を尋ね参らせし其時
の妾の心も今静が判官を慕ふ心もかはらめや石橋山の合戦に
君の御行衛如何ならんと朝夕心も心ならず御跡を慕ひ参らせ
しも今ぞ静の思ひならめ賤のおだまき繰り返し昔しを今にな
すよしもあれかすと祈るは貞女の操にて身につまされて覺へ
ず涙にむせび候哀れ昔を思ひ妻の心を酌ませ玉ひて一片の御
賞祠こそあらまほしふこそ存候

曲

内や床かしき玉垂れの御簾はこゝに鎖されたり人

五五

五六
々如何にと静の身を案じ煩ふ折柄に綾の錦の巻物
に卯の花重ねの御衣添へて賜はりけるぞ難有き

曲

静はこれを押し戴き長居は却て恐れありと虎の尾
を踏む鎌倉の威勢も怖ぢず道すぐに退出しける心
のうち哀れにも又雄々しかりける

静畢

明治四十年六月十五日印刷
明治四十年六月三十日發行

定價金 參拾錢

著作權
所有

發行者	印刷者	印刷所
菅谷秋水	白土幸力	東京市神田區美土代町二丁目一番地
	三光堂	東京市神田區美土代町二丁目一番地
	鮎澤宗平	東京市芝區芝榮町十八番地

發行所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

白光書院

358
14

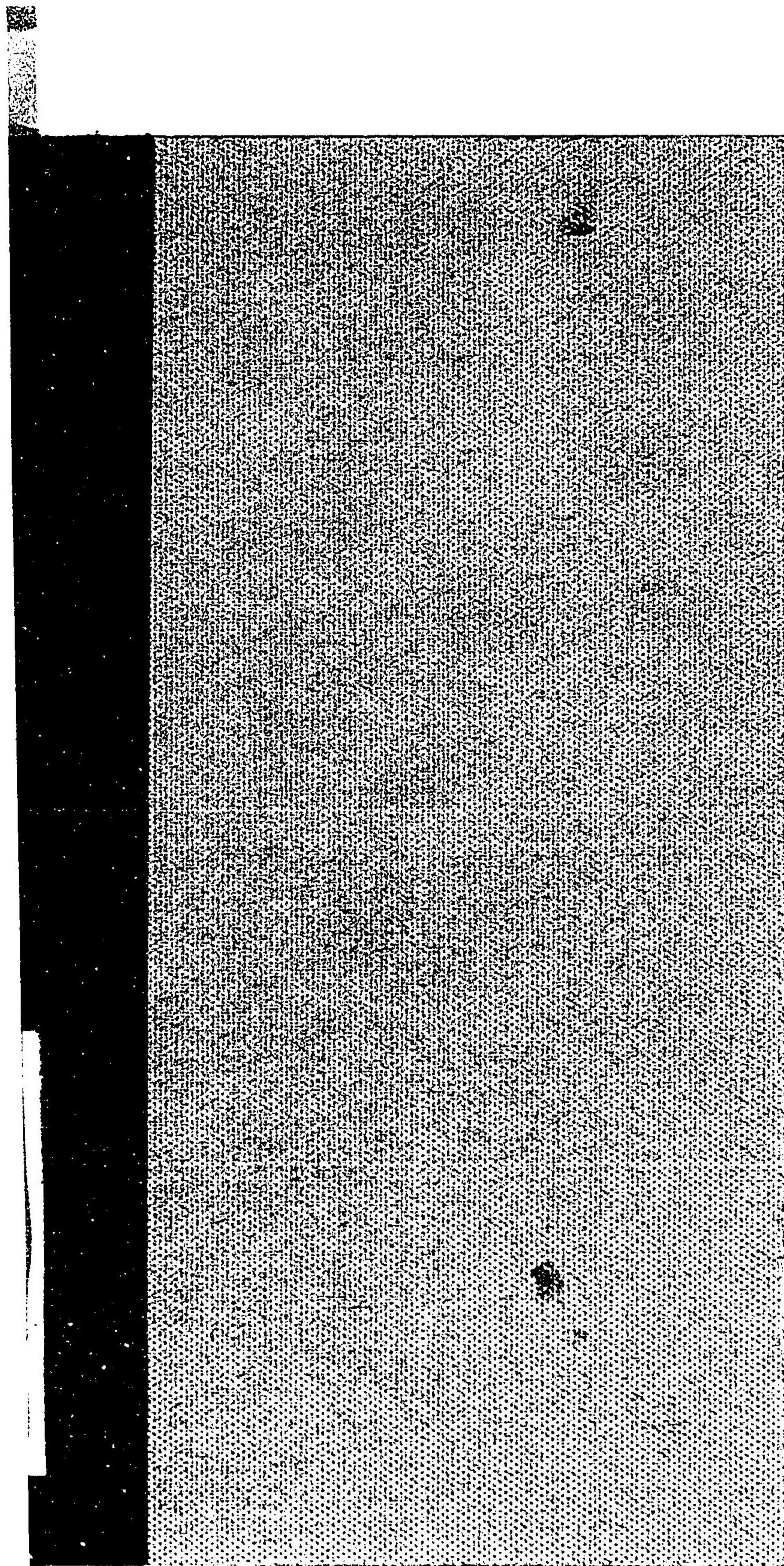
賣 捌 所

神田區錦町二丁目三番地 勉 强 堂

神田區表神保町三番地 東 京 堂

京橋區中橋七番地 前川文榮閣

10-6



特 50

199

静

国立国会図書館

205198-000-7

特50-199

新曲静

菅谷 秋水 / 著

M40

EDV-0225

